書　評

R・ウエレック、A・ウォーレン共著

「文学の理論」　太田三郎訳

この本のことを或日本の文学者が、「大した本ではないが、日本ではまだこんな本さえも出ていない」と評しているのを見たことがあるが、これはものを正しく評価しようと努力しないで頭からけなす（そしてこれほど容易なことはない）という日本のインテリの悪い一面を丸出しにした様な言葉ではないかと思われる。しかしそんな偏見を去つて眺めてみると、この本はむしろ大したものと言わねばならぬ。

この本の原書 Rene Wellek & Austin Warren, *Theory of Literature*, Harcourt Brace, 1956は、チェッコ人で、エール大学の比較文学教授であるルネ・ウエレック氏と、ミシガン大学教授オーステイン・ウォーレン氏の共著で、原書（普及改訂版）で本文二六〇頁、註四三頁、参考書目四一頁、日本語訳で本文A5版四〇五頁、註五四頁の力作である。これでも分る様に、本書の第一の特色は、ぼう大な参考書の引用或は参照による豊富な基礎づけにあり、その註は実に五〇六項目を数え、しかも一つの項目に数冊の本或は論文が参照されていることは珍らしくない。もう一つの特色は、米、英、独、仏、ラテン、イタリアの各国語の原書だけでなく、ウエレック氏がチェッコ人である関係で、ソ連、チェッコスロバキア等の東欧諸国における業績まで自由に摂取され、今までの研究より更に視野を広げていることである。我々は一読この資料のぼう大さに圧倒されると共に、学問の世界の厳粛さに頭の下るのを覚える。

日本では「まだこん本さえ出ていない」どころか、こんな本に似た本さえ出ていないのである。日本人ほど文学の好きな国民はないと言われ、又文学についての評論は、文芸雑誌のみならず、日本的ジャーナリズムの特殊形態である綜合雑誌まで毎号賑わしながら、文学そのもの、文学の本質についての科学的研究が、ほとんど放置されていることは奇妙な現象といわねばならぬ。原理をもたない評論がいつもの様に水掛け論に終つても、別に不思議ではない。そういう混とんたる状態の中から、ささやかであろうとも、何かしつかりした土台を求めたいと思う人にとつて、本書は幾多の資料と示唆を与えてくれるであろう。

それは著者達が、今までの文学についてのいろいろな考察や研究の成果を集大成したという点だけでなく、それらの考え方に、一つの立場からいわば交通整理を与えているその方法においてである。本書第三編「文学研究上の非本質的態度」で文学と伝記、心理学、社会、諸観念、その他の芸術の関係を扱い、第四編「文学の本質的研究」で文学作品の分析をやつていることでも分る様に、文学と心理、思想、社会等との関係を非本質的と考え、形式即内容の立場から、音韻、イメジ、文体、技法等の分析を本質的研究としている点に、著者等のいわゆるニュー・クリティシズム的立場があるのだろう。そしてその観点から、尖鋭な刃物の様な文体で、従来の通俗的考え方にメスを入れてゆくやり方は爽快といわねばならぬ。しかし同時にその考え方にも、やはり或る限界があることは、彼等の説の中のいくらかの内部的矛盾にあらわれている。例えば文学と思想との関係について、「哲学即ちイデオロギー的内容とは、適切な脈絡をもつていれば、数個の重要な芸術的価値ー複雑と一貫性という芸術的価値ーをつよめるものである故に芸術的価値を増大することになるとおもえる。」（一五六頁）といつて思想を単なる芸術的価値に還元しながら、一方においては、「文学はイメジャリーと詩句のなかに翻訳されている哲学的知識をでなくて、文学が人生にたいする一般的態度を表現していること、詩人は一般には、哲学の主題でもある問題を非体系的に答えるが、その詩人的な答えかたが時代と環境のかわるのに応じてさまざまにかわること、以上のことをウンガーは正しく主張している。」（一四六頁）という様に、文学が非体系的な思想であるということを認めている。又文学作品の分析において、ポーランドの哲学者インガーデンの説を採用しているが、彼のあげた「形而上の性質」について、著者達は、「『形而上の性質』という層はインガーデンに芸術作品のもつ『哲学的意味』という問題を、ありふれたインテリ的

な誤謬におちいる危険をともなわずに、再び提出させることになつている。」（一九七頁）といつているのも同様な考え方であろう。すると一体著者等の文学と思想に関する「統一的解釈」はどうなるのか、我々には分らない。これらの矛盾とあいまいさは、文学と社会、心理等の関係についてもいくらか見られるが、これは根本的には恐らく著者達がそのニュー・クリティシズム的温室から出た時にのみ解決される問題であろう。そしてその時著者等のいう「非本質的研究」が果して「非本質的」であつたかどうかも、改めて問題になるであろう。しかしいずれにしても、この本の考え方に賛成すると否とにかかわらず、明日の文学論の出発点として、本書が一読の価値あることは間違ない。

最後にこの本の日本語訳は比較文学の主唱者、東京工業大学、昭和女子大学講師太田三郎氏の手になるものだけに、流ちょうで原文の知的で鋭利な文体を良く伝えている。しかし始め一読の時散見した意味不明の個所を後で入手した原書と照応したら判然とした経験がある。例えば前述の第十二章「芸術としての文学作品の分析」のところで、「インガーデンは、別個のものとして区別する必要がないような層をもう二つそなえている。『世界』"world" という層は特殊な観点より考えられている。しかしこの層は必ずしも表現されているのでなくて暗示されているものなのである。文学に表現されている事件は一同一の事件、たとえば、扉とバタンとしめることでさえー、たとえば、『目でみられた』ものとして或は『耳できかれた』ものとして表現されるにちがいない…。」この日本語の意味は良く分らないが、次の原文の意味なら分るだろう。Ingarden adds two other strata which may not have to be distinguished as separable. The stratum of 'world' is seen from a particular viewpoint, which is not necessarily stated but is implied. An event presented in literature can be, for example, presented as 'seen, or as 'heard:' even the same event, for example, the banging of a door... (p.140)

これでみると関係代名詞 "which" の先行詞は「この層」でなく「この特殊な観点」であり、それでやつと意味が一貫する。又"can be..... presented" を「表現されるにちがいない。」としたのは、訳者にしては意外なミスであり、又「音素を『小説』fiction と称し」（二〇〇頁）などと、いうのは一寸愉快で、誰も音素を小説と称する人はいないだろう。この場合の「フイクション」は明らかに「架空」という様な意味にすぎない。

以上少しあらさがしみたいなことをしたが、全体的には訳本でも別にさして差支えないことは私自身最初訳本だけを読んで感激したことを附記すれば充分であろう。ただ折角の好著であるだけに将来改訂版をなされるときに、十分の準備をされることを願つて止まない。

（筑摩書房　定価四八〇円）

西山　保